

# 戦後台湾文学の日本における受容

## —黄春明「莎啞娜啦・再見（さよなら・再見）」を例として—

西端 彩

### はじめに

台湾の作家、黄春明（1935～）の小説「莎啞娜啦・再見（さよなら・再見）」は、日本人観光客の「買春観光」の実態を暴露した小説であると同時に、主人公、黄青年の内面の苦悩、葛藤、抵抗などがリアルに描かれた小説である。1973年に台湾の二大新聞のひとつである『中国時報』の文化紙面「人間副刊」に発表された。日本では1979年に戦後初の台湾現代文学として邦訳本『さよなら・再見』が刊行され、発行部数は一万部を突破し、ロングセラーとなった。それは現在の台湾文学ないし台湾に関する出版物の発行・売り上げ状況からみても異例のことである。

黄春明は日本語版の序に次のような文章を寄せている。「日本の読者がこの文章を目にするまでにはしばらく時間があるというのに、広げた原稿用紙を前にちょっと考えただけで、すぐに読者を意識し、そのいぶかしげな視線が気にかかって、バツの悪さを感じてしまう。／これでは、外国の読者の皆さんから誤解を招きそうである。この黄という男はいささか傲慢であり、人の好意を解せないヤツだと。とりわけ、日本の友人の中には、私が日本人に偏見を持っていると決め込む人が出てくるかもしれない。」<sup>1)</sup>

このように、日本での出版という事態に困惑気味である様子がうかがえるが、むしろ「バツの悪さ」を感じたのは日本人である。この作品は「日本人のまだ書いたことのない日本人像」を描き、日本の読者に「苦い後味」を残した。

邦訳本の帯には、作家、野坂昭如の「ぼくは台湾を知らない。いや、見事に、知ろうとしない。そして、ぼくにとって知らないで済まされることではないのだ。」というコメントが載せられている。戦後の日本において台湾は、中国との関係上、“視野の外”に押しやられており、台湾を語ることは一種のタブーとしての雰囲気さえあった。そのために台湾研究の土壌はまだ形成されておらず、現代の台湾を知る手がかりがなく、興味本位でこの小説を手にした読者の多くは、その内容から、重大な問題を突きつけられることとなったのである。にもかかわらず、「さよなら・再見」は日本において根を張った。この邦訳本刊行のち、80年代半ば頃から台湾文学の翻訳本が次々と出版されたこと、映画化の企画が日本から持ち上がったことなどがその証拠である。そして現在の台湾文学研究の発展をも促したと考えることができるかもしれない。そこで、今回は「さよなら・再見」の日本における受容について台湾との比較を通して考えてみたい。

### 1. 黄春明について

1935年、台湾宜蘭県羅東鎮生まれ。1960年代初期に創作を始め、台湾の二大紙のひとつ『聯合報』の副刊や反共中国青年救国団の刊行物『幼獅文藝』への投稿発表経験を経て、1966年、台北で雑誌『文学季刊』の創刊に参加する。小説の多くは1970年代前半までに発表されたもので、代表作に「看海的日子（海を見つめる日）」（1967年）、「鑼（銅鑼）」（1968年）、「兒子的大玩偶（坊やの人形）」（1969年）などがあり、いずれも収められた作品集がベストセラーとなり、「郷土文学」の作家として確固たる地位を築く。これらは日本語にも翻訳されている。<sup>2)</sup>作品の多くは、故郷の宜蘭地方を舞台とし、そこに生きる「小人物（社会の下層にいる人々）」を描いたもので、底流にあるのはいずれも台湾社会における新旧の生活方式、観念の衝突などというテーマであり、さらにそこにはストーリーテラーとしてのユーモア、民衆への温かいまなざしが織り込まれている。「莎啞娜啦・再見（さよなら・再見）」は、70年代初期の台湾の国際関係の変化に呼応して、より現実社会に即した文学の理想を掲げ創作した作品である。

### 2. 台湾における受容

「莎啞娜啦・再見（さよなら・再見）」は、評論家の何欣が「発表されるやいなや、読者の拍手喝采を浴びた<sup>3)</sup>」と述べるように、称賛をもって受け入れられた。黄青年の苦悩や葛藤などのリアルな感情が同時代の多くの読者の共感を得たのである。台湾における作品のヒット現象の流れとして、雑誌で特集が組まれる、作品集の出版という例が挙げられる。まず、1973～74年にかけて『書評書目』という文芸雑誌において何欣をはじめとした評論家が文章を載せている。作品集は1974～75年にかけて作品集が三巻続けて出版された。74年には「談黄春明的小説（黄春明の小説について語ろう）」という特集が組まれた。その中では「さよなら・再見」に関して、「題材との距離が现实生活に近いほどよい、少なくとも文学上の任務はここにある<sup>4)</sup>、また、「黄青年は現実の力に屈するが、(個人的、民族的な)自尊心がたえず生まれ、黄青年は他の方法を探し求めそれを持ち続けようとする。この小説は黄春明の小説創作が一段上へと上り始める、試金石となるだろう<sup>5)</sup>」という文章が載せられた。ここでは内容そのものよりも作家と創作のあり方が評価されたといえる。このような評価へと至ったのは、当時の「郷土文学」潮流の影響が関係している。

台湾は1970年代に入り、1971年に釣魚島事件、国連脱退、1972年に日中国交正常化による日台断交などのさまざまな事件によって、国際関係において孤立し始める。そこで台湾の人々が台湾という存在を見つめなおすことを迫られ、台湾内部への関心が高まっていく中で、「郷土回帰」という潮流が生まれる。文化面におけるその潮流の影響は、現実の台湾社会への関心を文学に反映させた「郷土文学」という形に現れていった。「郷土文学」の主な特徴は、黄春明が述べるような「社会全体において、一般大衆の精神的糧となり、また社会の進歩を推し進めるさまざまな力の一つとなることができ<sup>6)</sup>るリアリズムの文学と言え<sup>7)</sup>るが、「さよなら・再見」のリアリズムはその新しい文学潮流における特徴となり、「郷土文学」の発展に大きな役割を果たしたのである。

では、この小説で読者の共感を得た、黄青年の苦悩、葛藤とはどのようなものだったのだろうか。

小説の冒頭、「この二日の間に、私は二つ罪なことをしてしまったのだが、思い直してみると、愉快な気持ちが湧いてくるのを抑えきれない。／その一つは、七人の日本人を我が同胞女性の所へ案内して遊ばせたこと、もう一つは、その日本人たちと一人の中国青年の間にニセの橋をかけた……つまり嘘の通訳をしてやったことだ。」<sup>7)</sup>と、主人公・黄青年の独白から始まる。

二つの罪とあるが、一つめは会社の社長命令によって、日本から買春観光にやって来た七人の顧客を自身の故郷の温泉地へと案内したことである。同僚の前で「極端な民族主義を振りかざして日本人を罵倒したばかり」の黄青年は、自身の面子を守ることと仕事を続けるためには案内役を引き受けることの間で葛藤し苦しむ。その葛藤とは、中国大陸での抗日戦争の（他人が語る）記憶を自身のアイデンティティに結びつけることによって生まれたものであり、そしてその観光客の一行が抗日戦争に参加した世代であることが、黄青年を一層苦しめるのである。

「一個の人間として、また一中国人として、私は中国現代史を身近の現実問題として体験してきたので、以前からずっと日本人を憎んでいた。私は昔の事をいろいろ話してくれる祖父が好きだったが、祖父の右足は若い頃日本人にへし折られたそうで、腿から下がなかった。<sup>8)</sup>

「私たちは、みんな涙を浮かべて鄒先生の話聞き、うまれるのが遅すぎて、八年の抗戦に参加できず、日本の鬼どもをやっつけて同胞の仇を討つことができなかつたのを恨めしく思ったものだった。<sup>9)</sup>

結局、生活のために案内役を引き受けた黄青年は、表面的には日本人たちにうまく対応し友好的に振舞うが、「あなたの日本語は標準語で流暢だ」と言われると「心の中で呪い、憤慨」し、「彼らがどう考えていようとも、潜在意識の中に、台湾を自分たちの植民地と見る気持がまだあるのだ。いや、ただ潜在意識の面だけではない。実際の行動上でも、日本のピ

ジネスマンが台湾で肩を切っているように、彼らの経済植民地を威張って歩きまわっているのだ。<sup>10)</sup>と痛烈な批判を加える。

この小説の時代背景として、台湾の研究者、張炎憲は「1970年代の小説は、まだ中国の思想を主流とする時代であり、本当の台湾文学はまだ現れていなかった……その中で語られるのはすべて中国人の悲哀であり、台湾人の悲哀ではない。その中で語られるのは中国社会、中国的思想、及び日本人が台湾に来て中国人を侵略したことだから、台湾意識の問題は見えてこない。しかし、その中で書かれる中国人は台湾人のことだ。」<sup>11)</sup>と述べている。このように複雑な現代台湾社会の構造の中で、複雑なアイデンティティを抱えながら生きる台湾人のリアルな感情である憤怒と悲哀、そして「郷土文学」という新しい文化文学潮流が交わった、まさに時代が生み出した作品として読まれることとなったのである。

### 3. 日本における受容とその背景

日本では1979年9月、出版社めこんより『さよなら・再見』が刊行される。戦後初の台湾現代小説の翻訳であるこの小説は、台湾のベストセラーと紹介され、上述のとおり発行部数1万部を突破した。まずは刊行までの経緯をみてみたい。

「さよなら・再見」が初めて翻訳されたのは、めこんによる出版が決まってからではなく、それ以前の1977年9月～78年3月に、福田桂二氏によってすでに翻訳され、『世論時報』に掲載されていた。その後、雑誌『朝日アジアレビュー』35巻(78年秋号)にて「台湾の現状」という特集が生まれ、田中宏氏によって「台湾における新しい文学潮流」という見出しで、「さよなら・再見」を中心に台湾文学が紹介された。この田中氏の紹介を見て、出版社の編集長が出版の企画を申し出たのだという<sup>12)</sup>。すでに訳出された「さよなら・再見」に手を加え、貧しさゆえに幼い頃に養女に出され、娼婦に身を落とした女性が子どもを産み母親となることで人間の尊厳を回復する「海を見つめる日」、アメリカ軍の車に轢かれた貧しい台湾人労働者とその家族が賠償として手厚い待遇を受ける「りんごの味」が新たに翻訳され収められた『さよなら・再見』が刊行された。

刊行以前からこの小説は注目されており、メディアでは日本人の「買春観光」が告発されたということが大きく取り上げられた。例えば、1978年5月2日付『神戸新聞』夕刊は、「日本男児の行状告発一生々しい“侵略”ぶり」、6月16日付“Mainichi Daily News”では“Taiwan Bestseller Shocks Japanese — Satirizes Sex-Tourism”（台湾のベストセラー、日本人をギョッとさす—買春観光を揶揄）との見出しがつけられた。1977年の統計では、台湾を訪れる日本人は、56万1千余人、台湾の外国人観光客の50.5%を占めている<sup>13)</sup>。76年には51万6千余人、51.2%だったが、なかでも日本人旅行者の93.1%は

男性によって占められている<sup>14</sup>ということから、もはや日本人の「買春」旅行の実情は容易に推測された。その点で、当初「さよなら・再見」はルポルタージュとして認識されたともいえる。

翌年の「さよなら・再見」刊行直前には、雑誌『朝日ジャーナル』8月17～24日号に、「日本人の“ゆがみ”に迫る東南アジア文学」と題し、「……描かれる日本人の姿をわれ関せずと一笑に付すのはむずかしい。ことがかなり事実に近いという理由にもよるが、それにもまして、日本人を見据えようという作者の態度が小説の背後に透けて見えるからだ。この100年ばかり、あらぬ方向を見るに急で、ちかくからじいっと見つめられるという経験に乏しい日本人は、こういう小説を読むといささか居ごこちの悪い思いを味わう。」という書評が載せられた。

さらに、『朝日新聞』「読書」欄（1979年10月28日）に掲載された、感想の中にも「決して深刻ではなく、軽過ぎるくらい軽妙に書かれた一編なのだが、それだけにむしろ面白いとは言い切れぬ苦い後味が残る。日本人のまだ書いたことのない日本人像がここにある。それにしても、台湾でベストセラー（一九七四年刊）であるこの作品集の邦訳が、アメリカ、西ドイツ、韓国に続く四番目のものであることは考えさせられる。」とある。

また、評論家の安宇植は「半世紀もの長きにわたって侵されてきた台湾の民衆感情や機微に疎い読者には、読後の後味が苦いのはやむをえないことであろう」（『朝日ジャーナル』1980年1月18日号）と書評を寄せている。

このようにみると、メディアで大きく取り上げられたことばかりが先行しているかのようだが、その評論を読めば、読者のレベルで、単なる興味本位の暴露小説というよりも、読後に味わう気まずさに表れているように、突きつけられた日本と台湾の戦後の問題を否応なしに考えさせられる小説として読まれていったことがわかる。またそれだけではなく、中国文学研究者にとっても「同時代性」を感じさせる中国語の作品にはじめての出会い、文学としての衝撃は大きかったという<sup>15</sup>。

さらに、「さよなら・再見」刊行後、80年代半ば頃から台湾文学の翻訳本が次々と出版されており、その多くは黄春明と同時代の作家たちの作品である<sup>16</sup>、また映画化の企画は東京で始まり、日本人キャストも多く参加した。その歩みの原点には、日本人がし

きりに気にする西洋のまなざしではない、アジアのまなざしの中の日本人に触れた驚きがあったのではないだろうか。その驚きとは、台湾が『さよなら・再見』の表紙に描かれた作者自画像のようにじろりと見据えたような視線をこちらに向けてきた／いることに気づいたからにはほかならないだろう。まさに、日本における台湾現代文学の受容は、このような台湾からのまなざしの“発見”という過程を通して行われていったことなのかもしれない。

以上、今回のジョイントゼミ参加に際して新たに取り組み始めたテーマであったため、試論にとどまる簡単な報告となった。今後も考察を続け研究を深めていきたいと考えている。

## 注

- 1 黄春明「日本語訳への序」田中宏訳『さよなら・再見』1頁。めこん、1979年。
- 2 「海を見つめる日」（田中宏訳）、『さよなら・再見』（1979年）に所収。「銅鑼」（垂水千恵訳）、「坊やの人形」（山口守訳）、『鹿港からきた男』、国書刊行会、2001年に所収。
- 3 何欣『書評書目』第八期、1973年11月。（何欣『當代台湾作家論』116頁より引用）
- 4 柳南城『「莎啞娜拉・再見」與『鑼』』『書評書目』第十五期、1974年7月、109頁。
- 5 雲笙鶴「被命運播弄的一群」、同上、108頁。
- 6 同注1、3頁。
- 7 「さよなら・再見」福田桂二訳『さよなら・再見』、頁。めこん、1979年。
- 8 同上12頁。
- 9 同上13頁。
- 10 同上34頁。
- 11 張炎憲「文學的交響 黄春明文學與宜蘭風土」『宜蘭文獻雜誌』第11期 1994年9月。
- 12 田中宏「あとがき」『さよなら・再見』219～220頁。めこん、1979年。
- 13 総理府『昭和54年版 観光白書』
- 14 田中宏氏による統計数字、出典不明。『朝日アジアレビュー』35巻、95頁、1978年。
- 15 宮尾正樹教授よりご助言をいただいた。
- 16 赤松美和子「在日本出版的台灣文學目録」『台灣文學研究集刊』第二期、175～192頁。台湾大学台湾文学研究所、2006年11月。